
アルとマシューの魔法修行

Arthur

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アルとマシューの魔法修行

【Nコード】

N1241BA

【作者名】

Arthur

【あらすじ】

双子のマシューとアルフレッド。二人はとある満月の夜、魔法修行に出かけた。

夜汽車にのって着いた港街、そこには兄弟でパン屋を営む魔法使い、アーサーとフランスがいた。

なんだか、想像力の「そ」の字もないありきたりなお話ですが、暇な方は見てやってください。

1話と2話をつなげました。

満月の夜は旅立ちの日。（前書き）

満月の夜に出発したいじゃないか！！今日は記念すべき日なんだぞ
発想力のない作者はヘタリアと何かのパロしかできないと思うんです。
で、文章力もありません。アマゾン川並みの広さの心を持って
この小説に挑んでください。

満月の夜は旅立ちの日。

？東北東の風、風力1、晴れやかな満月の夜になるでしょう？

風の音、草がこすれあう音、蜂の飛ぶ音。たくさんの音に囲まれながら、俺はラジオの天気予報を聞いていた。なぜかって？今日は記念すべき独り立ち、あつ違う。二人立ちの日になるかもしれないからさ。旅立ちに良い天気は欠かせないだろう？俺は、自分を鍛えるために修行に出るんだ！

「アルー？ホットケーキ焼けたよー！早く戻って来てくれよー！」この俺を呼ぶ声の主はマシユーって奴。俺の双子の兄貴なんだ。独り立ちじゃなくて二人立ちなのはマシユーと一緒に修行に出かけるからさ！ああ、そういえば肝心な自己紹介を忘れていたね。俺は魔法使いの血を受け継ぐ、「アルフレッド」さ！！

さっきの話に戻るよ。えーっと・マシユーのホットケーキはすごく美味しいんだ！！おいしいホットケーキを食べる前に天気予報の事を皆に伝えなくちゃ！！

「マシユー！！今日は満月だ！！晴れるってさ！！早く師匠たちに伝えに行こう！！」

俺は、俺の事を迎えに来てくれたマシユーの前を走って通り過ぎ、師匠たちのいる家へと向かう。

「王躍^{フンヤオ}！！ 菊！！ 今日俺たち出発するよ！！」

開いている窓から家の中にいる二人に話しかける。

「はあ？！ホントに行くつもりだあるか？！お前たちにはまだ早いある！！それにあれはかなり昔の」

「いいじゃないか！！君たちは俺たちと同じ年の時に修行に行った

「んだろ？あ、菊ー！あのラジオもらうぞー！！」

「アルフレッドー！！」

「ぼわぁん！！」

王躍は薬を作っていたのだが、大声を出したせいで心が乱れたのだろう。薬はものすごい音を立てて爆発してしまった。

「H A H A H A」

「スミマセン……。王さん……。」

階段を急いで上がり自分の部屋にあがっている俺の後ろに続くマシユーは、階段を上がりながら王躍に謝っていた。

（とにかく！！俺は絶対、修行に行くんだぞ！！）

俺は勢いよく階段を駆け上がった。

「ねえ、アルー。やっぱり、王さんたちの言うとおりにした方がいいよ。修行は……。」

僕は、大きなバックに自分の荷物を押し込んで出発の準備をしているアルに話しかける。

「何言ってるんだい？君だって父さんたちの、本当のこと、知りたいたらどう？」

アルは荷物を押し込んでいた手を止めて、僕に、少し怒った感じの厳しい表情を向ける。

「そう……。だね……。」

（アル……。まだ父さんたちの事を……。もう、いいじゃないか……。あんな事件、早く忘れてしまおうよ……。もし、あの時僕が見たものが夢じゃなかったら、二人は……。）

「あの、お二人とも。」

後ろから菊さんの声がしたものだから僕の頭の動きが一瞬止まる。だって、考えてた人がいきなり目の前に現れたら、びっくりするでしょ？良い事じゃなかったらなおさらね。

「・・・どうか、なさいましたか・・・？」

そんな僕をみて菊さんは心配そうに顔を覗き込んでくる。

「ああ！！ハイ！大丈夫です・・・。」

そう答えた僕を見て菊さんはにっこりと微笑む。

「なあ、菊！俺たち、今夜修行に行ってもいいよなあ？」

突然、アルは菊さんの着物の袖をぐいぐい引っ張りながら菊さんに話しかける。菊さんは「着くずれしてしまいますよ。」と困った顔をしてアルの腕を袖から離させる。

「・・・はあ。修行に出る、ですか。でも、修行はとても大変ですよ？」

一息ついてから菊さんは眉をひそめながらそう言った。

「大変じゃなきゃ修行じゃないじゃないか！何言ってるんだい、菊！！」

いつものように笑顔で答えるアル。菊さんは眉をひそめた顔のまま、少し口角をあげた表情を僕たちに見せて部屋を出ていってしまった。

僕は、ふと階段を下りていく菊さんを見た。その時の菊さんの表情それは、いつもの菊さんからは想像できないような厳しい表情だったんだ。

「王さん。やはりお二人は修行に行くつもりですよ。」
薬を作りなおしている我の所に菊がやって来た。できるだけ表情に

しないようにしているようだったが、
我と菊は付き合いが長い。本当はともあせっているのがよく分かった。

まあ、当然だろう。あの二人が修行に出て、あの街に着いてしまつたら。そこにいる兄弟に二人が会ってしまったら。そこで、真実を知ってしまったら。

四方を守る守り神よ。どうか、あの二人との関係が、今のままずっと。

（・・・無理あるか・・・？まあ、我はたくさん酷い事したある。貴方達の罰を受ける覚悟はできてるあるよ・・・。）

「そう・・・あるか・・・。まあ、あの街は結構遠いある。二人も、ホウキで街を探すはずある。きつと、大丈夫あるよ。」

守り神よ。さっきの願いが聞き入れてもらえないのなら、これが最後の願いでかまわねえある。

菊の・・・。

満月の夜は旅立ちの日。（後書き）

はい！ここまでありがとうございます。さっさとパロやめて自分でストーリー考えろや！という方もいらっしゃるでしょう。本当に申し訳ありません。

ですが！！このあとがきをあなたが読んでいるという事は、あなたがこの小説を最後まで読んでくれたという事。本当にありがとうございます。

1話を読みきることができたあなたならきっと大丈夫！最後までよろしく願いします！！

シナティをぶれぜんと。(前書き)

題名適当につけたのであんまり本編と関係ありません。補足、という事で。

シナティをぶれぜんと。

荷物の用意は途中で飽きてしまったアルは、荷物をほっぽり出して僕の隣でごろごろしていた。

「なあ、マシュー。」

ごろごろしているだけというのも飽きたのだろう。アルは僕に話しかけてきた。

「なあに？アル。」

どうせアルの荷物も僕が準備するんだろうな・・・という事を考えているからか少し声が沈む。

「修行先ってどうやって見つけるんだい？ホウキだけじゃ遠くまで行けないだろう？そうになると、近い所になっちゃうのかなあ・・・修行先。」

うつぶせになっていたアルは僕を見上げて不安そうに尋ねてきた。

「うゝん・・・。別に移動手段はホウキじゃなきゃいけないってわけじゃないけど・・・。修行先は魔法使いのいる街に行けばいいんだよ。実はね・・・。」

ここで僕が王さんの書斎にこっそり入ってかき集めた世界各地の魔法使いの資料が載っているメモをポケットから取り出す。

このメモ、書くの大変だったんだよね、実は王さんの書斎にある秘密文庫のないようなんだ。王さんに口が怪しい感じのネコのぬいぐるみをあげて油断させて・・・。まさかあんなに気に入ってくれるとは思わなかったよ・・・。

「じゃじゃーん！！すごいでしょ！！これに載ってる人たち、みんな魔法使いなんだよ！」

僕はメモの両端を掴みアルの顔の前に突き出した。

「WOW！！凄いじゃないか！マシュー！さすがは、俺の兄貴だ！！なにになー？」

メモを眺めるアル。しかし、しばらくすると顔をしかめてしまった。
「うゝん．．。なんか難しいんだぞ。マシユーが決めておいてくれ。」

「うん。わかった．．。」

「あ、そうだ。できる限り父さんの秘密を知ってそんな魔法使いを選んでもくれよ！それと、移動手段はホウキ以外ので！」

（ほんとに．．まかせっきりなんだから．．。アルは．．。）

シナティをぶれぜんと (後書き)

アル「なあ、マシユー。」

マシユ「なんだい？」

アル「この話が中途半端なのは2話を一話と合体させたら、もともとの2話の本編のところが空欄になっちゃったからなんだろう？」

マシユ「言わないであげて・・・作者は作者で頑張ったんだとおもうよ・・・」

夜汽車での出会い

「じゃあ、行つて来るんだぞ!!」

「行つてきますね。」

そう言つて二人は夜汽車に乗りこんだ。「行つてらっしゃい。」
「気をつけるあるよ」と言いながら電車の窓から手を振る二人に手を振り返した。

「行つて・・・しまいましたね・・・。」

「ああ、まさか汽車で行くとは思つてなかったある・・・。もしかしたらあの街に・・・。」

私たちの不安は募つていくばかりでした。

「ふう・・・。やっと修行の始まりだな!!マシユー!!」

「しーっ!!他のお客さん目が覚めちゃうでしょ!!今、夜なんだから静かにしててよ!!」

僕がそう言つとアルは口元を手で押さえて辺りをきよきよ見回してから俺に笑つて見せた。

（ホントにアルはお茶目なんだから。全く・・・）

一度窓の外を見てからアルの事を見た。そしたら、この短時間の間にアルは寝むりに就いていて。そんなアルの寝顔を見ていたら僕も、いつの間にか眠りについていた。

「ん。ああ、アーサー、来てくれたんか！助かったわあ！ホンマ、あのお客さんぜんぜん目え覚まさないねん！！」

「ああ・・・にしても、なんでお前の運転する汽車はこうも寝て起きない奴が多いんだ・・・？」

アーサーは、俺の運転していた汽車の終点、「ポートマリティーン」のホームで電車に乗った俺と話していた。

「そんなん、俺の運転がすつばらしく気持ちいからに決まっとるやろ！！まあ、そんなんええから、さつさと魔法であいつら起こしてえな！！！」

「分かつてるよ！！あ、これ俺の為だからな！！ただ、えっと・・・魔法の練習の為だ！！決してお前の為なんかじゃ・・・！！」

「わあつてるて。ササツと電車ん中入り。」

ぶつぶつ言いながらアーサーは電車の中に入って来た。てか、お前の魔力なら別に練習しなくてもいいだろ、と言おうとしたけど、喉で押さえた。

（機嫌そこねられたら、困るわ・・・。）

「ふう・・・。Wake up. Of sleep over time.」

アーサーが眠っている二人の客に両手をかざし、呪文を唱えた。なにも起こっていないように見えたが確実に呪文は効いていたようで「ふあああ・・・。ましゅー・・・、ここどこだい？」

「知らないよ・・・、なんでも僕に聞かないで・・・。」

さつきまで叩いてもトマトを顔に押し付けても起きなかった客二人が目を覚ましたのだ。まだふわふわした感じだったが、二人はアーサーの声で確実に起きることになる。

「てめえら・・・！！さつさと起きろ！！もう、終点なんだよっ！！」途端に背中をピンと伸ばす二人。これは・・・魔法じゃなさそうだ。

「うわあ！！なんだい？！君は！！HEROのお休み中だったのに！！失礼じゃないか！！」

眼鏡愛用者のようで眼鏡をかけながらアーサーに反論する。そいつの連れと思われるもう一人の客はともおどおどしている。

「終点なのに起きねえ、お前の方がよっぽど失礼だ・・・。」

「うるさいなあ。とにかく、もうひと眠りさせてもらうぞ！！」

反省も何もしていないようで少年は毛布をかぶってもう一度寝ようとする。

「てんめえ・・・！！いい加減にしろよ・・・！！」

「HEROは寝てますよ」だっ！

ピチっ！

（え・・・？なんか今変な音し）

「こんのガキどもおおおお！！！！こうなったら俺の魔法でコイツらのことスコーンの材料にしてやるっ！！」

サツと懷から杖を出したアーサーを俺は咄嗟にアーサーを止めに入る。

「んなっ！！そんなことしたらあかんで、アーサーっ！！！！」

（え・・・？今、「アーサー」って・・・！！）

ガシッ！！

「あなた・・・魔法使いの、アーサーさんなんですかつ

？！」

夜汽車での出会い（後書き）

（舞台裏）

アル「なあ、マシユー」

マシユ「なに？」

アル「君、アーサーに抱きつくのに抵抗なかったのかい？」

マシユ「え・・・」

アサ「うるっせえ、ばかぁ!!」

二人の魔法使い

「あなた・・・魔法使いの、アーサーさんなんですかつ　　？！」
突然俺に抱きついてきた少年、抱きついたというよりは跳びついたという感じだろうか。さっきまでおどおどしていただけでよく意識していなかったから、いきなり跳びつかれると正直びっくりする。

「あ・・・ああ・・・」

まだ言葉を伸ばし切っていなかった所に、少年が言葉を重ねる。

「あの・・・！！僕たち魔法使いで、今、修行の身なんです！！どうか、僕たちに魔法を教えてくださいませんか？」

まっすぐな瞳で真剣に頼まれると、なかなか断れないもんだ。

「え、ああ。俺は別にいいが・・・。フランスの許可を取ってからでもいいか？」

少し遠慮勝ちに言っていると、少年は満面の笑みで「もちろんです！！！」と答えた。

（なんか・・・勝手に話が進んでいるんだぞ・・・。）

「おい！マシューー！！どうしてそんなヤツに魔法を教わるんだい？この街には、彼以外の魔法使いがいるだろう？」

俺がそう言っているとアーサーという青年が悲しそうな顔をしながらこう言った。

「この街にはもう、俺とフランス位しか大きな魔法を使える奴は残っていない。3年前の西と東の大戦争で、みんな死にしまった・・・。」

そう言っているとアーサーはキュッと口元を固く結んで黙りこくってしまった。

（3年・・・前・・・？）

アルは僕の横で目をまん丸に見開いていた。3年前、それは父さんたちが死んだ年だ。

（アル・・・やっぱり父さんたちの事を・・・。）

西と東の魔法を使った大戦争、それに巻き込まれてたくさんの魔法使いが亡くなった。もちろん、魔法を使えない一般の人も。

その戦争があった年、僕とアルは、まだ王^{クワン}さんたちの所で魔法を習っていなかったんだ。今僕たちのいる、西の港町「ポートマリティーン」と東の山岳街「シャンシヨン」の丁度真ん中あたりの街、「ブレ」という街で、僕たち二人は父さんに魔法を習っていた。

西の港町と東の山岳都市の戦争が行われた場所は、僕たちの住む「ブレ」だった。予告もなしに突然降り注ぐ魔法攻撃に、僕たちの街の人々は対応しきれなかった。僕たちの目の前で、父さんも、母さんも、街の人も、みんな命を落としたんだ。

しかし、僕の回想は言わせないと言わんばかりにアーサーさんが閉じていた口を開いた。

「まあ、とにかくだ！俺の家に置いてやつから、ついてこい！！」
そう言っただけで歩いていくアーサーに、車掌さんが「また頼むで〜！」
と言って手を振っている。

「うるせえ！アントーニョ！！」

（あれ・・・？ホントにこの人、あのアーサーさんなのかな・・・
？やけにはっちゃけてるんだけど・・・）

僕たちの修行は、まだ始まったばかりです。

二人の魔法使い（後書き）

ここまで読んでくださって本当にありがとうございます。

ぐちゃぐちゃしてて分かりづらいし頭の悪い表現ではありますが、
これからよろしくお願いします。

黒十字（前書き）

皆様の好きなキャラがしょっぱなから死んでしまっているかもしれ
ません。

注意してください・・・。

黒十字

「アーサー・・・、フェリシ、アーノを、よろしく頼む・・・。」
「ルートっ？ルートっ!？」

いくらルートの事を揺さぶっても、ルートの瞼が再び上がる事はなかった。

「フェリシアーノをよろしく」と言いながら俺に黒十字を手渡したルート。フェリシアーノにこれを渡せという事なのだろう。でも。

「フェリシアーノは、今どこにいる・・・?」

フェリシアーノとはこの戦争ではぐれてしまったのだ。アイツがどこにいるかなんて分かるはずもない。
生きているのかさえ分からない。

俺は何をしていいか分からなかった。

腕に乗っているルートを丁寧に地面に寝かせ、のそのそその場に立った。そして、周りを見回す。

(ルート・・・ギルベルトに、イヴァンまで・・・。)

みんな街のあちこちに横たわっていた。それぞれの衣服には血がべっとり付き、もう息をしていないのはそばに寄らなくても分かる。
その場に立っていたのは、俺ひとりだった。

「サー！……サー！」

俺を悪夢から救い出すように誰かが俺の名前を呼んでいる。

（誰だ　？）

そう考えている間も、誰かは俺の名前を呼び続ける。

「……サー！……サー！……」

がばっ！！！！

俺の事を呼んでいる声の主が分かった所で俺は思い切り目を覚ます。

「……なんだ。フランスか……」

「なんだってことは無いんじゃない？みんな待ってるよ。あの子たち連れてきたのはアーサーだろ？きちんと俺に紹介してよ」

そう言いながらフランスは俺の部屋を出ていってしまった。

「……ああ」

そんなフランスを見ながら小さく返事をする俺。返事をしたとき、もうフランスの姿は見えなかったけど。

（さっさと用意するか……）

のろのろとベッドを降り、クローゼットをあけていつもの服を取り出す。最後に緑のマント。これで完璧……じゃない。

机の引き出しにしまっている黒十字。ルートが息を引き取る前に俺に手渡しした物だ。俺はそれをいつもポケットに入れている。

フェリシアーノに会ったら……これを渡すんだ。それまでは、アイツ等の所に行けない。

ポケットに入っている黒十字を強く握りしめ、俺は自分の部屋のドアを開けた。

黒十字（後書き）

ルート「……………」

ギル「……………」

イヴァン「……………」

コルツ

「

本当に申し訳ありません……。そして、ありがとうございます！

L·o p p o r t u n i t a

ガチャン

階段を下りてリビングのドアを開けた。

「遅いんだぞ！」

「あるっ！静かにしてなよー！」

ドアを開けたとたんたくさんの声が耳に入ってくる。

「おまえら……。静かにしろお！！」

俺が大きな声を張って部屋を静かにさせる。静かになったのを確認して俺は席に着いた。

「よし……。じゃあ、お前らの自己紹介からだ。」

目の前にいる兄弟二人は小声で相談している。4秒ほどしてから、いつもおどおどしている方がこちらを向いた。

「えっと、僕はマシユーです。こっちが双子の弟のアルフレッド。アルって呼んであげてください。」

「おう。俺は、アーサーだ。ここでコイツと一緒にパン屋をやっている。あ、コイツは俺の兄貴でフランススだ。」

俺は親指でフランススの事を指差しながら自己紹介を進めた。

「うーん。一緒にパン屋やってるっていつても、コイツはスコーンしか作れないから。真っ黒の、ね。」

フランススは俺に聞こえないよう少し小さめの声でマシユーとアルにそう教えたが、全て丸聞こえだ。

「んなっ！！最近ホットケーキも作れるようになったっ！」

「どうせそれも黒こげだろうがぁ！」

俺とフランススはお互いの首を掴みながら取っ組み合いを始める。いつまでたっても終わらなそうな俺たちの争いを終わらせた声がつ。

「二人とも！！そんな争いさつさとやめ！！それより、お前らに話したい事があるんや！！」

今まで見たことないような満面の笑顔でアントーニヨは部屋に入ってきた。

「お前・・・やけに上機嫌だな・・・？どうした？トマト豊作か？」

フランシスは俺の首から手を離してぽかんとした顔でアントーニヨを指差しながら口を開く。アントーニヨと付き合いの長いフランシスがこれほど驚いているのだから、余程の一大事なのだろう。

「トマト豊作もええけど・・・、もつとええことがあつたんや！！それがなあ・・・」

アントーニヨは笑っていた。なのに、アントーニヨの深い緑色の眼から大粒の涙が流れ落ちてきたのだ。

「それが・・・ロヴィーノが・・・！！目え覚ましてん・・・！！」涙をぬぐいながら話すアントーニヨ。

俺は、アントーニヨの話を疑った。ロヴィーノは3年前の戦争の時、大けがを負ってしまったのだ。その怪我が原因でずっと目を開いていなかった。医者には、「もう一生目を覚まさないかもしれない。覚悟はしておいた方がいい。」とまで言われていたのだ。

「仕事から帰ったら、ロヴィーノ、ベッドから出て窓の外眺めとつてん・・・！！皆に早く伝えたかったさかい、ロヴィーノにジツとしとるよう言つて家飛び出して来たんや！！はよロヴィーノんこ行こー！！」

俺たちは、何も言わずアントーニヨの家へと向かった。

L・o p p o r t u n i t a (後書き)

アーサー「ホントにホットケーキ作れるからな……。ちょっと黒いけど。」

フラ「うっわ！！アーサー何それ？！^{ダークマター}暗黒物質！！」

今回の話も読んでくださってありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1241ba/>

アルとマシュの魔法修行

2012年1月14日17時56分発行